

本との関わり

会計研究科教授 粥川 和枝



自分と本の関わりを考えると、まずは、専門の会計学の本があげられるだろう。会計学
の分野は、近年、国際化が非常にめざましい。国内会計基準と国際財務報告基準(IFRS)との
コンバージェンス(共通化)、さらにはIFRSのアドプション(強制適用)が中心的な問題となっている。わが国においてもIFRSの影響により、会計基準の新設・改訂が著しく、それに

対応して多くの本が出版・改定されている。勉強のために、これまで以上に多くの新しい本を手に入れることが必要となっている。

有り難いことに最近は、机の前にいながら、Amazonや各書店のホームページ等から簡単に本が手に入るようになった。論文についても、CiNii(国立情報学研究所)等のデータベースを利用して、論文全文のPDFの閲覧が可能なものもある。

ただ便利になった分、以前に比べて図書館に出向く回数が減ったことは残念なことである。図書館では、学生の頃、論文を書くため

に1日中図書館に籠って必要な論文をコピーし続けたこと、本を読んだり勉強したりしたことがなつかしく思い出される。今でも図書館の空気は、自分を落ち着かせ、勉強に向かわせてくれるものを持っている。

本や論文を手に入れた後は、新しい知識を得るためそれらを読むことになる。論文を書くに際しても、まずは読むことから始まる。研究指導の学生にも、「書くことは読むこと」と教えている。たくさんの文献を読むことによって必要な知識を蓄え、やっと書くことを始めることができるのである。

このように、私が本を読む機会は、仕事を中心となっているのが現状である。だから、時間のある時は、学生時代は小説等も読んだができるだけ本は読まず、スポーツをする等其他のことをするようにしてきた。しかし最近、読書家の娘の影響もあり、会計学以外の本を読むようになってきた。仕事で本をたくさん読んでいたのだから、とにかく文字はもういいという気持ちになっていたが、小説を読むことを再開したら思いのほか楽しくリラックスできたのである。

最近読んだ本としては、娘からもらった『ハナミズキ』、『食堂かたつむり』等がある。『ハナミズキ』は、自身の夢のために東京の大学に進んだ主人公と、故郷に残り漁師になった恋人が、互いを思いながらもすれ違っていくが、10年後故郷のハナミズキが咲く頃、二人に再会の奇跡が訪れるという物語である。また、『食堂かたつむり』は、都会で心に傷を負った主人公が山間の故郷に戻り、1日1組のお客様だけをもてなす、決まったメニューのない小さな食堂を始めるという内容である。両方とも映画化されており、女子学生のみなさんにおすすめの本である。自分で選んだ本としては、『満ちたりぬ月』、『つめたいよるに』、『瑠璃でもなく、玻璃でもなく』、『風花』等がある。寝る前の30分間ほど読むのであるが、あまり重い内容の本は好まない。

この原稿を書くに当たって気付いたのであるが、どうも私は女性作家の本、あるいは女性が主人公の本ばかり好んで読んでいるようである。そこで、芥川賞・直木賞作家の中で、どのくらい女性の作家がいるのかを調

べてみることにした。

芥川賞は現在まで145回を数えているが、私が調べた限りでは、第8回の中里恒子『乗合馬車』を始まりに150名中39名が女性受賞者となっている。直木賞の方も現在まで145回を数え、第11回の堤千代『小指』から173名中39名が女性であり、両方合わせると4分の1程度が女性作家となっている。

とくに、近年は、女性作家の受賞が増加傾向にあるようである。たとえば、2000年以降の芥川賞をみても、大道珠貴、金原ひとみ、綿矢りさ、絲山秋子、青山七恵、川上未映子、楊逸、津村紀久子、赤染晶子、朝吹真理子となっている。直木賞では、山本文緒、唯川恵、村山由佳、江國香織、角田光代、三浦しをん、森絵都、松井今朝子、桜庭一樹、井上荒野、中島京子、木内昇というように、多くの女性が受賞している。私が読んできた本には、純文学中心の芥川賞のものは非常に少ないが、直木賞のものはたくさん含まれている。中島京子の『小さいおうち』、江國香織『号泣する準備はできていた』、唯川恵『肩ごしの恋人』等、どれも女性を主人公にした面白い作品であった。

女性作家の受賞増加は、同性として嬉しいかぎりである。その理由はいろいろとあるだろうが、同性の作家による同性を主人公にした内容に共感しやすく、多くの女性がそれらの本を手取るようになったこともその一つにあげられるのではないだろうか。私自身も、本を読みながら、同性の主人公と自分の考えを比べたり、自分の人生を考えてみたりしているように思える。

もちろん、これからも私にとって本を読むことは仕事であり、読む本の多くは会計学の本になるであろう。しかし、趣味としても、小説等の本を読むことは、私にとって非常に有意義な時間となっている。趣味の読書としては楽しいことが一番なので、これからも内容が軽い偏っているといわれても、自分の読みたい本を読んでいこうと思うのである。